



ポストコロニアル日本の在日朝鮮人による労働「運動」

-- 早船ちよ『キューポラのある街』及び 梁石日『夜を賭けて』における映画と文芸の表象

クリスティン デネヒー

この論文は、1950年代後半の戦後日本を舞台とした2作品における家族と近隣コミュニティを考察したものである。早船ちよ著『キューポラのある街』の舞台は埼玉県の工業都市川口市であり、梁石日著『夜を賭けて』は大阪城近郊の在日居住地区と長崎県の大村収容所を舞台としている。本稿ではまず1967年に発表された映画版『キューポラのある街』を論じる。本作品は、主人公である中学三年生のジュンを演じた吉永小百合のデビュー作であり、批評家や映画史研究者によってよく論じられている。この映画と梁の小説は共に、日本の戦後復興と経済発展にも関わらず貧しい地区に生きる人々を描いたフィクション作品である。しかし、私が焦点を当てたいのは、川口や大阪のような都市で朝鮮人の民族性と階級がどのように関わり合うかという問題である。先の帝国主義国家としての日本という歴史的背景に特に注目したい。両テキスト共に、一般の人々が経験した厳しい肉体的、精神的苦痛に焦点を当てており、戦後日本における帝国主義の様々な負の遺産について考察する道筋を提供している。

私が映画『キューポラのある街』を知ったのは、1950年代後半の、在日朝鮮人たちの北朝鮮への帰還運動に関して研究をしていた時だった。この映画が初めて上演されたのは1960年代初頭で、帰還運動について日本人観客に紹介した初の大衆映画として知られていた。¹ しかし早船ちよによる原作の小説は、民族問題の観点からポストコロニアル日本の人口統計を扱った作品として読まれたり批評されたりすることは非常にまれである。むしろ、たいいていの批評家が注目するのは、早船が児童文学の先駆者であったことの方である。² 1950年代後半に本作品が初めて連載された時、出版市場は、特に若者文学の裕福な消費者として子供とその親に焦点を当てて発達しているところであった。さらに当時、教育者や図書館司書は、母親を対象に、毎日20分子供と読書することを勧めるキャンペーンを行っており、このこともこの分野の市場の発達を促した。今日では早船は、貧困と再建に続く、戦後の変わりゆく社会環境における日本人の若者の日々の経験や心情を反映した小説を書いた作家として高く評価されている。

¹ この映画の重要性に関するコメントをくださったことを、二村一夫、美朝子両氏に感謝します。

² 『キューポラのある街：早船ちよ』（2006年 東京 けやき書房）より。本書は小説版及び作家の人気と重要性に関して以前の同僚や教師たちが論考したものを収録している。本稿では小説のテキストは特に分析しないが、小説版とそれに先立つ連載版に関する言及は、この2006年に出版された論文集からのものである。

『キューポラのある街』の主人公はジュンという少女である。ジュンは労働者階級の家に生まれ、父親は酒浸り、母親は出産したばかりである。³ さらに家族はその他にいくつかの問題を抱えている。小説版、映画版両方とも的人气は主にジュンのヒロイズムにある。彼女は両親の反対にも関わらず、高校に行くという強い希望を持っている。小説版は革新的で、若者の雇用など（ジュンは隠れてパチンコ店でアルバイトをしている）様々な社会問題を扱っている。さらにセクシュアリティの問題も取り上げられている。ジュンは赤ん坊の誕生を見たり（父親は、ジュンの弟が呼びにいったにも関わらず飲みについてしまう）、学校では県立高校入試を目標にする彼女を見守ってくれる男性教師に恋心を抱いたりする。映画版と比べると、小説版は彼女のセクシュアリティや成熟に関する「内的」葛藤をよくとらえている。しかし、映画版では輪姦未遂のシーンや、ジュンが修学旅行に行かずに近所の年上の少女と踊りにいたりするシーンが描かれている。地元の不良少年に飲み物に薬を混ぜられ気を失った後、ジュンはぎりぎりのところで助けられ、破れたシャツのまま逃げ出すのである。

1961年に小説が発表された後、早船は3万円の文学賞を授与されたが、これは労働者階級の子供たち-多くの面ですでに大人の世界に足を踏み入れた子供たち-の社会的現実を描く彼女の才能が認められたためである。早船は若い読者からたくさんの手紙を受け取った。彼/彼女たちは小説の話について触れるというよりも、自分たちの生活や考え方を代弁するような登場人物を生み出してくれたことを感謝した。⁴ ほとんどの読者や批評家にとって、本小説の重要な点は、戦後の高度経済成長と関係する問題を提起していることだった。ジュンと弟のタカユキは、マスメディア、消費文化、公害というような新しい流行や現象であふれんばかりの時代に育つ現代っ子の代表として見られた。こうした環境の下で、ジュンとタカユキは、勤勉な「サラリーマン」の父と「教育ママ」という中流階級の理想とはかけ離れた貧しい両親の元に生まれるという不運に直面しているという点で哀れみをもって描かれているが、他方では、そういった環境のもとでも生き残り、さらに明るく過ごすことのできる子供としてポジティブに描かれてもいる。『キューポラのある街』で、この家族や近隣の人々の力学をニュアンスをもってとらえた早船の能力は、彼女自身が「庶民」であることに寄る。⁵

『キューポラのある街』を主に戦後の高度経済成長というコンテキストに位置づけるのは妥当であるが、一方で同様に重要なのは、ポストコロニアル日本というコンテキストである。ジュンとタカユキは、後に北朝鮮に渡ることになるヨシエとサンキチと友情を育む。この出来事は特に物語の前面に押し出されている訳ではないが、川口市に住む朝鮮人の存在と1950年代後半の帰還運動は、物語を感情的なクライマックスへと向かわせる、朝鮮半

³ 小説版では、出産するのはジュンの母親ではなく叔母のハナエである。ハナエの夫の啓吉は漁師で、釜山の収容所に抑留されている。早船、『キューポラのある街1 ジュン』（講談社、1977年）、56-57頁。

⁴ 早船ちよ、123頁。

⁵ 早船ちよ、361頁。

島に向かう為に電車に乗るサンキチに、ジュンとタカユキは半狂乱になって手を振り続けるのである。⁶ 映画における登場人物の関係を考察することにより、北朝鮮へ渡ることが、ジュンたちにとっては大変感情的なものではあっても、朝鮮人にとっては自然なものであると描かれていることがわかる。

この映画で初めて朝鮮について言及されるのは、タカユキが家から逃げ出して、友人のサンキチと食堂で夕飯を分け合うシーンである。タカユキの母は彼のポケットに150円が入っているのを見つけ、どこで手に入れたのか問いつめるが、これで喧嘩になる。タカユキはちょっとした近所の泥棒を手伝って得たものであることを隠しているからである。父親はサンキチが泥棒を働いたと責め、彼を殴りだす。それでタカユキはサンキチの母が経営する食堂に逃げ込む。その後少年たちは彼らの隠れ家（川辺の藪の中にある洞穴みたいなもの）に行き、一夜を過ごす。そこでタカユキは当然のこととして、サンキチに朝鮮行きについて尋ねる。このシーンで、少年たちはなぜ北朝鮮と韓国が折り合いが悪いのかについて無邪気に考えを巡らせる。彼らには単純に訳が分からないからである。というのも、「おんなじ朝鮮人」だからである。

朝鮮半島分断の歴史はここでは存在しない。彼らにとっては、朝鮮人は朝鮮半島に住むべきなのである。しかし、もう一つ、少年たちが朝鮮人に関して当然のことと思っているのは、すべての朝鮮人は貧しいということである。再度少年たちは無邪気に考えを巡らせながら、朝鮮人はどこに住もうと貧乏だろうと笑い合う。つまり朝鮮に住んでも朝鮮人は貧乏だということである。このシーンで観客はサンキチの母親が日本人であることを知るが、彼女の息子は彼女が家族と一緒に朝鮮に渡るものと思っている。朝鮮人男性と結婚したからである。この物語においては、サンキチ自身が日本の朝鮮半島植民地化という歴史によって生まれた存在であるにも関わらず、慣習的、地政学的な朝鮮半島の歴史は全く描かれていない。しかしタカユキとの友情において、サンキチは主に労働者階級の、インディアンやアメリカのカウボーイ映画のような雄叫びを挙げながら学校帰りに女の子を追いかけ回したりするような、おどけた少年として描かれている。

しかし、子供の間でさえも存在する厳しい差別を映し出した一場面がある。サンキチは学芸会で人參の役を与えられるが、劇の最中タカユキは客席から「朝鮮人參」と叫ぶ。これに他の生徒たちも加わり、サンキチを嘲り侮辱するのである。グラウンドで取っ組み合いをした後、少年たちは仲直りをする。この差別発言はタカユキにとっては単なる悪ふざけにすぎないもので、近所の少女たちをからかうのと同じようなものなのである。民族に基づいた構造的不公平や、在留資格の問題、ポストコロニアル日本の社会的及び経済的ヒエラルキーの原因といったような複雑な問題は語られない。⁷ タカユキの友人に対するこ

⁶ 映画の最後のシーンで、サンキチは一人で電車に乗る。1日ほど前に、父親と姉と一度は出発したのだが、日本人の母親が恋しくて戻って来てしまったのである。この間に父と姉は先に朝鮮半島へ向かってしまう。しかしサンキチが家に戻って来たときには、母親は別の男性と結婚する為すでに街を去ってしまっていた。

⁷ しかし、小説版では李承晩ライン（韓国政府による日本人漁師の勾留問題）に関する明

の振る舞いは、彼の父親の朝鮮人に対する差別発言と照らし合わせて考えられるべきものである。ジュンの友人のヨシエはジュンの為に秘密でパチンコ店でのアルバイトを紹介してくれるが、ジュンがヨシエについて話すのを聞いた父親は、いつものように酔っぱらって呂律が回らないながらも朝鮮人に対する差別を隠そうともせず、娘が朝鮮人と友達付き合いするのを厳しくとがめるのである。

ジュンのヨシエとの友情はもう一人のクラスメートとの友情とはまったく対照的である。このクラスメートは中流家庭の縮図のような少女で、ジュンが彼女の自宅で一緒に数学を勉強した後に出される華奢な皿にのった西洋風のケーキに象徴されるような存在である。この少女は父親を通して、失業中のジュンの父親のために仕事を見つけてくれる。(ジュンの父親は再度すぐに失業してしまうのだが。)一方でこの友人はジュンが切望するものを象徴している。楽天的な学生で(彼女は修学旅行のため学校に行く道すがらスキップをしハミングまでするが、これは彼女が楽天的なことをよく表している)、素敵なおカディガンを着て、マイカーを運転する父親を溺愛している。そして最も重要なことには、彼女は高校入試の準備をする時間と費用、家庭環境を持っている。しかし他方では、彼女はジュンの社会移動の限界を象徴している。これはジュンの母親がこの友情やジュンが勉強に時間をかけすぎることによく思っていないことにもっともよく現れている。このやつれた母親は、ジュンが本を読んでばかりだと怒り、入試勉強にすべての努力をつぎ込む前に、もっと家の手伝いをするべきだし高校がいかに大変か気づくべきだという。さらに父親が怒鳴って暴れながら、自分の子供たちは中学を卒業したらすぐに働きに出るんだと宣言した後、ジュンは高校に進むことを考え直し、工場で働くことを決心する。しかし、この時点ですでに母親はジュンに夢をあきらめさせたことを後悔しているようであり、中学卒業後すぐに働きに出るというジュンの決意に矛盾する感情を見せている。母親が情けなく先見の明を欠いている様子は、彼女をよりいっそう哀れに見せ、若いジュンとは正反対である。ジュンは他の誰の為でもなく、「自分」がそうしたいから働くのだと宣言する。

ジュンの父親が働いていた短い間のある日、ジュンはヨシエに家計がましになったのもうパチンコ店でアルバイトをする必要はなくなったと告げる。このシーンで初めて、私たちはジュンとヨシエの間に、ジュンと別の友人(数学と一緒に勉強した少女)とのつながりとは異なった感情的なつながりが存在することに気付く。二人の少年たちが北朝鮮への帰還を当然のこととして話す場面と同様に、ヨシエが「朝鮮に帰るから」自分もパチンコ店をやめるのだと告げた時、ジュンは当然のこととして受け取る。ジュンの反応は陽気な励まし以上の何ものでもなく、「よかったね?」と言い学校へ走って戻っていくのである。しかしジュンが去った後、カメラはヨシエにフォーカスする。彼女は一人残され、友人の簡単な反応を寂しく思い、怒っているように見える。ヨシエが自転車の横に一人立ち尽くしている時に流れる悲しい音楽がさらに彼女の感情を強調する。

確な言及がある。とは言うものの、小説で提示されている「朝鮮問題」は、李政権を疑わしいものとし、労働者階級の日本人漁師とその家族の払った犠牲に焦点を当てている。

ヨシエが川口駅から朝鮮へ出発しようとするとき、ジュンが感じている二人の感情的つながりの深さが表面に表れる。二人は駅に集まった大勢の騒々しく歌う人々に混じってさよならを告げあう。ヨシエは自分の自転車を仲良くしてくれたジュンに譲り、二人はメロドラマ的に、お互いのつらいことをもっと話し合う時間がなかったことを悔やむ。涙を誘うような沈黙が流れるが、自転車のベルが1、2回鳴り、二人の少女たちは自分たちのつながりの元を再確認する。それは、戦後のこの時期にはすでに普通だと考えられていた家庭の経済的安定がない為に、若くしてパートタイムで働きに出ざるを得ないという困難に立ち向かわなければならないことである。少年たちの場合と同様に、ジュンとヨシエの問題は、貧困を当然のこととして受け入れてはいるが、不幸な境遇を乗り越えようとする若者の内的葛藤として描かれている。ここでもまた、若者たちを取り囲む大きな社会、政治、経済的な要因は語られない。

これは梁石日の小説『夜を賭けて』と対照的である。梁は歴史的流れを大阪城付近の貧しい地区に住む在日朝鮮人の物語に組み入れている。舞台は1950年代で、梁はいわゆるアパッチ族の搾取に焦点を当てている。アパッチ族とは、戦争中にアメリカのB-29に爆破された兵器工場の跡地の中から鉄屑を拾い集める朝鮮人につけられた名前である。小説を通して梁は、在日朝鮮人の制度的歴史背景に関する明確な言及だけでなく、様々な刺激的なにおいや気味の悪い音、苦難の力強いイメージ、常につきまとう不安と恐怖に支配された肉体といったものに特色づけられた雰囲気を描き出している。つまり、植民地時代と戦後の環境が地続きであることと、貧しい地区に住む朝鮮人たちが克服できないような困難に立ち向かい続ける様子が描かれている。

小説の冒頭から、川底からメタンガスを噴出する「死の川」の暗く鮮烈なイメージが描かれる。「死の川」は後に、労働者たちの排泄物により更に汚染される。より多くの労働者が鉄屑を求めて地区に流れ込んでくるからである。いくつかの場面で、梁はこのような暗さと汚物を、このような状況で生きることを強いられた朝鮮人の人間性の喪失と重ね合わせる。⁸ 一年の間に、寒さや病気、栄養失調で多くが死んでしまう。

梁は朝鮮人の生存を「出口のない戦い」と呼び、多くにとって、飢餓は警察よりも怖いものだと書く。⁹ 鉄屑を探し当てる現場に対する警察の取り締まりがいくら厳しくても、労働者たちは「ゲリラ交戦」を繰り返し、朝、昼、晩と、回転ドアを使って現場に侵入し、警察の存在をものともしない。さきに述べたように、こういった描写に先だって、梁はこの地区に住む朝鮮人の生活をより大きな地政学的なコンテクストの観点から見ている。例えば、朝鮮戦争は日本の経済復興のターニングポイントとして強調されており、読者は、米軍からの戦時中の軍需物資、日本の経済的繁栄、戦争がもたらした朝鮮半島での悲劇的結末について再考することを迫られる。¹⁰

⁸ 梁石日、『夜を賭けて』、39、216、400頁。

⁹ 梁、244頁。

民族のアイデンティティに関しても、梁は日本の朝鮮植民地化に関して簡潔にふれ、1939年11月の創氏改名が、日本政府による朝鮮人皇民化政策の結果であることを説明する。政府は日本と朝鮮が血縁であることを強調したのである。戦後もこの負の遺産は受け継がれ、地区の多くの朝鮮人は通名を使い続け、日本名と朝鮮名の両方を書いた表札を使い続けた。11 この日本語と朝鮮語のハイブリッド的使用は小説の他のキーポイントでも見られる。例えば、警察がアパッチ族に犬をけしかけると、労働者たちは誰か一人に、「犬がきたあ！」と朝鮮語で叫ばせることで警官の存在を皆に知らせる。12 朝鮮語は暗闇に響き渡るコードとして機能する。小説の後半で、大村収容所の韓国／朝鮮人収容者たちが暴力的に喧嘩をする場面では、一人が「もういい！やめろ！」と朝鮮語でいい喧嘩を治めようとするが、これに「パルゲンイ」（「アカ奴」）と朝鮮語でののしる者が続く。総連と関係する機関の活動家に対するそしりである。13 実のところ、主人公の金義夫は総連と関係していたので朝鮮語を話すことができたのである。

適宜な朝鮮語の使用にだけでなく、梁はこの地区の住民が、当時の戦後日本の主流とは異なった独特の知恵を共有していたことも描いている。このことは、あまりに多くのよそ者が鉄屑を求めてやってくる為に、地区の住民が外部からの侵入を遮断した後の集落のレイアウトにもっとも端的に見られる。混沌とした狭苦しい環境で、ほとんどのものが慣れるのに苦労するようなどころであると描かれている。14 集落の構造自体が複雑で、たくさんの小さな家が込み合っ建てられており、一度道を間違うと出口が見つからないほどである。しかし住民の間では口頭のネットワークが発展していた。例えば、アパッチ族の一人が真夜中に出くわして恐怖のあまり殺害してしまった警官の死体を埋めた場所は、皆が知っていた。また、朝鮮人が北朝鮮で新しい生活を始めるチャンスである帰還運動が進行中であること等のニュースを共有していた。15

このコミュニケーションネットワークのようなものは、特定の人物の噂を瞬時に広める。多くはその人物が共同便所で目撃されたのちに、いろんな機会に事細かな点まで噂されるのである。例えば、地元出身の高山健一が刑務所で9年間服役した後に戻って来たニュースは瞬く間に広まったが、これは公衆便所で女性と性交をしているところを目撃された後のことである。16 健一の帰郷のニュースを広める活発さに加えて、集落は必要に応じて沈黙を守ることもある。健一は同一の女性を包丁で脅し翌日家を出て行く。この女性は全身痣で覆われたまま一人残されるのである。このような暴力を目にしても、住人は何事もなかったかのように振る舞う。健一の母親は息子と距離を置き、集落の女性たちは健一の彼女は売春婦だと噂する。

¹⁰ 梁 13 頁。

¹¹ 梁、53 頁。

¹² 梁、226 頁。

¹³ 梁、432-433 頁。

¹⁴ 梁、197 頁。

¹⁵ 梁、223, 339 頁。

¹⁶ 梁、259 頁。

先に触れた日本名と朝鮮名の問題に関連して、最も明確な民族アイデンティティの自己監視のケースは初子が体現している。彼女はアパッチ族の金義夫が逮捕され長崎の近くの大村収容所に送られた後、彼を追って大阪を離れる。初子は社会一般における他の朝鮮人との関係を通して、戦後日本での自らの場所と言語を獲得しようとする。まず、彼女は長崎で生活を始めるに当たってバーで仕事を見つかるが、大村の収容者に会いに来たことを隠す為に通名を使う。大村は、初子と収容されている朝鮮人のつながりを示唆するコードのようなものだからである。通名を使うことは、たとえ初子自身が朝鮮人だと思われなくても、朝鮮人コミュニティとのつながりは否定的にとらえられているだろうことを前提としての対応である。結局初子は客の一人に朝鮮人かと尋ねられる。見抜かれたことに対するショックと、彼女を日本人だとばかり思っていた他のホステスたちの驚きようを目の当たりにして、彼女は羞恥心から直ちに真っ赤になる。梁は次のように書く。「このひと言で初子は素っ裸にされた屈辱を味わった。」¹⁷

金が大村に収容されている間に、読者は収容者たちが北朝鮮への帰還運動に着手していることを知らされる。¹⁸ 収容者の派閥争いが詳細に描かれており、多くのものが「南組」と「北組」に別れている。¹⁹ 金はこの闘争に巻き込まれ、他の収容者たちによって真夜中に叩きのめされ、骨折の治療と傷跡の縫合のため市の病院に送られる。この恐ろしい場面の後で梁は、李政権の転落(民主化運動の力に帰せられる)、続く朴正熙によるクーデター、さらに続く韓国から日本への政治亡命者、といった歴史的コンテクストを読者に与える。こういった背景のため、大村はあまりに多数の収容者を抱えており、10人収容できる部屋に200人が押し込まれている程だった。

このような状況の下で、このような血みどろの衝突は日本人看守の手による屈辱と相まって、戦後の繁栄とは正反対の、植民地時代の足かせを思い起こさせる。ここには、ジュンとヨシエのメロドラマ的涙の別れのシーンにいたような、励まし歌ってくれる群衆はいない。ここでは、1957年に日韓で規定された多くの収容者の投獄と韓国への強制送還の過程は当然のものとして描かれてはいない。『夜を賭けて』で梁石日は、登場人物に強いられた強化と監視を暴いている。彼の物語は大阪から長崎に至る朝鮮人地域の検閲されない感情と経験を読者に伝える。1960年代初頭の早船にとって、この強化と監視の過程はあま

¹⁷ 梁、479頁。

¹⁸ この家庭における日本政府の役割に関しては、Tessa Morris Suzuki, *Exodus to North Korea: shadows from Japan's Cold War* (Lanham, MD: Rowman & Littlefield Publishers, 2007) を参照されたい。

朝鮮人収容者についての論考は、金日編『脱出：大村収容所の人びと』(京都、三一書房、1956年)を参照されたい。

¹⁹ 梁、418頁。

りにも当然のこととされていた為、より大きな社会的、政治的コンテクストを疑問視することなく、批評家は小説を読み、観客は映画を見ることができたのである。焦点は日本の労働者階級に当てられ、このことはさらに工業都市川口の戦後の風景から朝鮮人の登場人物を完全に取り除くことを当然としたのである。

(翻訳：阿南順子)

学会 “Colonial Sensibility and Imperial Japan: Affect, Object, Embodiment”
(UCLA, 2007年12月)において発表。